

吉田の原稿が〇〇さんに書き直した原稿

「ハラミの宮」南北両説について

東京・赤坂例会 吉田 六雄

はじめに

アマテルカミがお生まれになったハラミの宮の地が、ホツマ研究者の間で南北両説に分かれている。

ホツマ通信七号（平成十二年十二月）・八号（十三年二月）で今村聰夫氏はハラミの宮を富士山の北側、現在甲府市内にある「酒折宮」に比定され、これに対し池田満氏は、ホツマ二十六号（平成十三年八月）に反論を載せ、ハラミの宮は富士山の南麓にあったと主張された。

また両氏の論文掲載以前に、ホツマ九号（平成八年五月）で鎭邦男氏はアマテルカミの最初の宮居・安国の宮（即ちハラミの宮）は相州大山の麓にあったと主張された。ハラミの宮の地理的位置を議論する上では、鎭氏の主張も大きく見て南説に加えて良いであろう。

この南北両説は富士山という日本のシンボルを中に挟んで、地理的に正反対の場所を主張しているのであるが、私の意見を最初に述べると、ハラミの宮の所在地は現在地甲府の「酒折宮」でなければならず、今村氏の北説に軍配を上げざるを得ない。

ハラミの宮名の変遷

ホツマツタエばかりに気を取られていた私は、総合的判断から、ハラミの宮が現在の「酒折宮」であると当然の如くに考えていた。

ミカサフミに、ハラミの宮の古名が「トシタ宮」とあり、「大日山南のトシタ宮」という記事も存在する、と指摘下さったのは池田氏であった。その記事を以って、池田氏はトシタ宮が大日山の南にあると主張されたが、私は池田氏の主張に釈然としなかった。それでは、ホツマに累々と記載される関連記事は何なのか。ホツマにおける記事はすべて「ハラミ（サカオリ）の宮は富士山の北側」を指向しているではないか。

ということで、改めてミカサおよびホツマの記事を辿って、今村・池田両論による南北説を再検討してみた。

両論の共通点である「トシタミヤ→ハラミ（サカオリ）ノミヤ→サカオリミヤ」の通り、ニニキネの時代までに同一所在地で宮名が変遷したことは確認された。

時代が下って、25—5「ムメヒトはハラに留まり」を池田氏は、ハラミの宮に留まったと解釈しておられるが、ニニキネの時代以降ハラミの宮はサカオリ宮と宮名が変わっているので、ハラを単純にハラミの宮と解するのには首肯

しかねる。後で言及するが、むしろニニキネ時代オオミヤと呼ばれていた宮をムメヒトが宮居にしたので、ムメオオミヤと呼び変えられたと解釈したい。

また、ヤマトタケ時代に新築されたオホマノトノをも、池田氏はハラミの宮付近として居られるが、40—4・5と40—48・9の記事を総合すると、ヤマトタケの願望を受けて、ミヤツ姫の父がサカオリ宮を描き写し絵図面を作って、領地のアイチ田に同一の宮を建てたもので、ホツマ研究者の大多数はオホマノトノについて現在の熱田神宮を想定している筈である。私もこの認識を是としている。

従って、ハラミ（サカオリ）の同一箇所での宮名変遷に関しては、今村・池田両論が一致する「トシタミヤ→ハラミ（サカオリ）ノミヤ→サカオリミヤ」は承認できるが、池田氏が更に加える「ハラ→ムメオオミヤ→オホマノトノ」は認める訳にはいかない。

余談であるが、池田氏はアマテルを八代アマカミ、ニニキネは十代アマカミの弟の方と紹介しておられる。これは池田氏の造語であろうか。ホツマ・ミカサは一貫してアマカミを七代イサナギ・イサナミまでとし、アマテルをヒカミまたはオオンカミ、ニニキネをアマキミ（ニニキネが最初）またはミマゴと呼んでいる。

南説の不合理

ハラミ（サカオリ）の所在地を推定する最初の好例を今村氏は挙げて居られるが、その箇所をホツマから引用し検討を加えよう（下段に漢字カナ混じり文を記載する）。

24—68	カチハタシ	スソノハシリテ	徒裸足	裾野走りて
24—69	オキツハマ	キミヨロコビテ	興津浜	君喜びて
	コシナラヘ	ユクオオミヤハ	輿並べ	行く大宮は
	ヤマスミノ	ミチムカエシテ	大山祇尊の	道迎えして
	ミトコロニ	スワガミアエハ	三所に	スワが御饗は
24—70	スハシリデ	サカオリミヤニ	須走で	サカオリ宮に
	イリマシテ		入りまして	

アシツ姫が徒裸足で興津浜に居るニニキネの許に駆け付け、輿を並べてサカオリ宮に向った道順はどう読んでも「興津浜→大宮→須走→サカオリ」である。この道順について、今村論が掲載される以前に、池田氏に問い合わせしたところ、「スバシリしたのはスワ（氏）で、ミアエは御饗ではなく御会えであり、ミトコロとは昔のトシタ宮・ハラミの宮の故地であるサカオリ宮と考える、という内容の回答を頂いた。この回答では、到底ホツマの文意を酌んだものとは言えず、さすがに今村論への反論に記載することは憚られたものと思われる。

その代わり、反論では「出典箇所が比較的場所論拠の鍵になりそうだが、案

外に論拠として薄い。富士山は古来から噴火が続いていて山姿の変化にともな
って地名にも変遷が起きていることを忘れるわけにはいかない。云々」とホツマ
記事解釈ではなく、観念論に持ち込もうとして居られる。

それなら、次に引用する孝霊天皇の行幸の経路はどうであろうか。

32-19	ヤヨイナカ	ハラミヤマエト	三月中	ハラミ山えと
	ミユキナル	ソノミチナリテ	行幸なる	その道成りて
	クロダヨリ	カグヤマカモヤ	黒田より	香久山賀茂や
	タガノミヤ	スワサカオリノ	多賀の宮	諏訪酒折の
32-20	タケヒテル	ミアエシテマツ	タケヒテル	御饗して待つ
	ヤマノボリ	クタルスハシリ	山登り	下る須走り
	スソメグリ	ムメオオミヤニ	裾巡り	梅大宮に
	イリキマス		入り居ます	

今村論文の説明と重複するが、この引用部分即ちヤマトフトニ天君（孝霊天皇）
の行幸は「クロダ（飛鳥のイホド宮の所在地）→香久山（奈良）→賀茂（京都）
→多賀（琵琶湖東）→諏訪→サカオリ」と進み、サカオリのタケヒテルから饗応
を受け、更に「サカオリ→山登り（富士登山）→下る須走り→裾巡り→ムメオオ
ミヤへ入り居ます」と行幸を続けられた。

孝霊天皇行幸の帰路について、ホツマは殊更に「南路を 都に帰り」と記載し
ている。これは引用部分で見た通り、往路は北路でその到達点がサカオリの宮で
あったことを受けての記述である。

孝霊天皇の富士山行経路は、甲府・酒折から御坂山地を越えて北側の吉田口か
ら登り、東側の須走口へと下山路を採られた。そして南回りで裾巡りをして、富
士山南西の梅大宮（現在の富士宮市・浅間神社）に入られた。

前述の「ハラミの宮名の変遷」で述べた繰り返しになるが、孝霊天皇の富士登
山は出発点がサカオリで、到着点はムメオオミヤである。池田氏はこれを同一宮
としておられる。天皇が富士登山をされている間に、宮名が歴史的変遷を遂げた
のであろうか。

本論に戻って、この山行経路は全く現在の地理・地形と一致するのである。そ
して、富士山頂を経由した以外は、先述の引用文でニニキネとアシツ姫が輿を並
べて辿った経路を逆行しているのである。従って、ヤマスミが道迎えした大宮は、
後の梅大宮であるという推論も成り立つ。

孝霊天皇の富士山行は、明らかに北から南へ経路を採っており、そのことは今
村氏が既に論じているにもかかわらず、反論する池田氏が何故黙殺するのであ
らうか。

孝霊天皇の時代から五百年前に噴火があり、裾野八湖の内三湖が埋まったが、
中の富士山本体は変わっていないと、引用部分の後に記載されている。

地質学的には富士山の寄生火山は南東から北西にかけて、また山頂から北東にかけて分布しており、現在の吉田口登山道も、須走口登山道も、過去に噴火した形跡の無い、安定した斜面を辿っている。従ってイサナギもフトニも現代と同じ登山道を登降したものと推定できる。

更に、山中湖から須走口周辺の地盤は第三紀層であり、当然ながら寄生火山が皆無であるから、池田氏が論じている如く、須走の位置や地名が噴火で変わったなどと、安易に言うことは出来ない筈である。

池田氏は南説補強のために、漢字文献を縷々引用されているが、本稿では本質を外れると思うので、言及しないことにする。池田氏ご自身が漢字文献を引用しておきながら、ヲシデ文献にまでは遡れないと述べておられるし、漢字文献に惑わされるよりも、ホツマ・ミカサの記事を細大漏らさず読み解くことが肝要と考える故である。

北説の補強

孝霊天皇が梅大宮に滞在中、田子の浦人が藤の花を捧げた縁で、ハラミ山をフジの山と改名された。藤の花を献上できる民間人は、当然地元の住人であろうが、田子の浦は富士宮市の浅間神社から最寄の海岸である。

孝霊天皇は都に戻られると、梅大宮のハフリ（祝主）であるホツミのオシウドに褒賞を与えた。ホツミ氏はオオヤマスミの子ミシマミゾクイの後裔で、三島神社を本拠地とした氏族である。ミシマミゾクイはムメヒトの重臣（副物主）である。この事からも、梅大宮は静岡県側にあったと推察される。

また孝霊天皇は、サカオリのタケヒテルの子タケトメを臣に請い、タケトメは武田氏の始祖になったとホツマは記載する。武田氏は織田信長に滅ぼされるまで、長く甲斐に君臨した名族である。この事からもサカオリ宮は山梨県側にあったと推測される。

「ヲヲヒヤマサノ トシタミヤ」の新解釈について

今村氏はホツマ通信八号の論文で「大日山は南にある」新解釈成立の可能性を発表された。それは「オオヒヤマ」と「サ」の二つの名詞を、同格で並立する二つの事象とする考え方である。

確かにミカサの原文には「オオヒヤマ」と「サ」の間に助詞の「ノ」が入っていない。仮にトシタ宮が富士山の南に在ると仮定すれば、池田論で述べられている通り、本来この助詞は入るべきで「オオヒヤマノ サノ トシタミヤ」が本来の文章ということになり、助詞の「ノ」が連続した二つの名詞に付くことになる。この文章をミカサに記事として挿入しようとするれば、五七調に整えるため、一字省く必要が生ずる。その場合には「オオヒヤマノサ トシタミヤ」と後の「ノ」

が省略され、ミカサ原文に復帰出来なくなる。何故なら「オオヒヤマノサ」なら「トシタミヤ」の状態（位置関係）を完全に表現しており、助詞の「ノ」を復活して考える必要が無くなるからである。従って逆説的に言えば、ミカサの編述者は元々トシタ宮がオオヒヤマの南にあったと、書こうとはしていなかった筈である。

現代人の感覚でヲシデ文献に助詞を挿入するような手を加えては、返って誤る恐れがあるという好例である。

おわりに

「ハラミの宮」南北両説について検討し、北説に軍配を上げたので、鐮氏の相州大山説も否定したことになるが、鐮氏の論拠についてだけ触れておきたい。

鐮氏は相州大山の別名が阿夫利山で、阿夫利神社の本来の意味は「天降り」であり、天照大神が天降ったと考え、これを論拠としておられる。

私はその考えに反対である。なぜなら、ハラミの宮が南北何れにあらうとも、天照大神はハラミの宮に天降ってはいない。ハラミの宮での治世中は、常に天照大神御自身が居られる場所が天で、その天を主宰されていたからだ。

天照大神が天降られたのは、皇子オシヒトに日嗣を譲られ、伊勢イサワに引退された時であると、ホツマに明記されている。その部分を引用して本稿を閉じることとする。

19b-1	フソキスス	モモミソエタノ	二十五鈴	百三十枝の
	トシサナト	ハルノハツヒニ	年サナト	春の初日に
	ヨノヒツギ	ミコオシヒトニ	世の日嗣	皇子オシヒトに
19b-2	ユツリマシ	アメヨリイセニ	譲りまし	天より伊勢に
	オリイマス		降りいます	

（よしだ・むつお 横浜市）